

二〇二一年度
卒業論文

八番問答より斟酌した曇鸞の往生観

〔五念門と十念の検討〕

コピー 厳禁

L180074

佐藤
舞里萌

目次

序論	1
本論	2
第一章 五念門	2
第一節 五念門と十念	2
第二節 往生行として重要視された理由	5
第二章 八番問答	7
第一節 各問答の役割	7
第二節 八番問答より参酌した十念解釈	9
結論	23
註	
参考文献	

コピー厳禁

序論

法然が浄土宗相承の祖師と定めた浄土五祖の初祖で親鸞が定めた七高僧である曇鸞は、『無量寿経優婆提舍願生偈註』（以下『往生論註』と略す）を記した。これは天親撰述の『無量寿経優婆提舍願生偈』（以下『浄土論』と略す）の注釈書である。曇鸞の往生観については、様々な研究が既に存在し、その解釈も多様ではあるが、私は曇鸞が往生対象としている人物がどのような人物なのか、又、往生可能範囲の行動はどのような行動なのかを詳しくみるために、私は、『浄土論』に示された五念門という行と『大無量寿経』第十八願から汲み取れる十念という行には往生する際どのような役割があるのか、五念門について十分に検討し、合わせて十念について詳細な記述がある八番問答を参考に曇鸞の往生観をみていきたいと思う。又、曇鸞が生きた歴史的背景と往生観の関連性及びその往生対象についても注目したい。本論に入る前に、前述にあげた二つの行について補足しておく。「五念門」とは、「若善男子・善女人、修五念門行成就、畢竟得生安樂国土、見彼阿弥陀仏。何等五念門。一者、禮拜門。二者、讚嘆門。三者、作願門。四者、觀察門、五者、廻向門。」¹に示される往生行である。又、「十念」とは、「設我得仏、十方衆生、至心信樂、欲生我國、乃至十念。若不生者、不取正覺。唯除五逆誹謗正法。」²に示されるように、『大無量寿経』第十八願及び『觀無量寿経』下下品の文を引用したものである。臨終の際、五逆・十悪を犯した者でも称名念仏や、心の中及び頭の中で阿弥陀仏を思い浮かべる憶念を行うことで浄土に往生できるという意味が十念には込められている。五念門も十念も往生する際に必要な行として曇鸞は捉えているが、私は浄土に往生したいと願う人は上品から下品まで存在する為、行の対象が曖昧であると感じた。又、前述の通り十念

は『浄土論』ではなく、『大無量寿経』第十八願からの引用で、『往生論註』にはその詳細が示されていない為、曇鸞が十念という行をもって何を伝えたかったのかが不明瞭であると感じた。十念の役割を明確にし、同時に五念門と十念の関係について往生対象や念の相続などの共通点を見つけ、考察していきたいと思う。又、五念門と十念の関係を明確にする為に、まずは独立したそれぞれの特徴についてまとめた後、曇鸞の主著である『往生論註』の八番問答より、五念門と十念の関係性及び曇鸞の十念解釈、その往生観についても考察していききたい。

本論

第一章 五念門

第一節 五念門と十念

『往生論註』に示される五念門という行は浄土に往生する際どのような役割を果たしているのか一つずつみていく。まず『浄土論』は、願生偈と長行の二部構成で、願生偈の冒頭には「世尊我一心、歸命尽十方無碍光如来、願生安樂国」と示されており、ここから釈尊の教えに従って阿弥陀仏の浄土に生まれたいと思う天親の気持ちが見える。それをうけて、「若善男子・善女人、修五念門行成就、畢竟得生安樂国土、見彼阿弥陀仏。何等五念門。一者、礼拝門。二者、讚嘆門。三者、作願門。四者、觀察門。五者、廻向門。」³と示されているように五念門と

は浄土往生の行であり、上の三門である礼拝門・讃嘆門・作願門と下の二門である観察門・回向門の五つの行で構成されている。『往生論註』巻上に「歸命盡十方无碍光如來者、歸命即是礼拝門」「歸命必是礼拝門」⁴と示されているように、礼拝門は身に阿弥陀仏を礼拝すること⁵であり、同じく讃嘆門は「盡十方无碍如來即是讃嘆門」「彼如來光明智相讚嘆。故知。此句是讃嘆門」⁶と示されているように、讃嘆門は十方衆生の無明の闇を取り除き、十方世界を照らす光明と名号のいわれを信じ、その修行は二知・三信の如実修行に限られ、口に仏名を称えて阿弥陀仏の功德を讃えること⁷を意味する。又、五念門は、

偈中分爲五念門。如下長行所釋。第一行四句相含有三念門。上三句是礼拝、讃嘆門。下一句是作願門。第二行論主自述我依佛經造論興佛教相應所服有宗。何故云、此爲成優波提舍名故。亦是成上三門起下二門。所以次之説從。第三行盡廿一行是觀察門。末後一行是廻向門。分偈章門竟。⁸

と示されるように『往生論註』の偈文に該当する。『往生論註』は巻上において願生偈の部分の注釈を、また巻下において長行の注釈が記されている。長行の冒頭に示されていた「尽十方無礙光如來」が讃嘆門を指すことは『往生論註』においては明らかである。そして三つ目の「願生安樂國者、此一句是作願門」⁹と示されているように、作願門は一心に専ら阿弥陀仏の浄土に生まれたいと願うこと¹⁰を意味し、四つ目の観察門は阿弥陀仏や菩薩の姿、浄土の莊嚴を思い浮かべることの意味する。又、観察とは表面的な理解ではなく、その奥にある本質をみる智慧のはたらきがあると考えられているため、観察門は智業と呼ばれている。そして最後の回向門は「廻向者廻己功德普施衆生、共見阿彌陀如來、生安樂國」¹¹と示されているように、自身の功德をあらゆる衆生に振りまいて共

に浄土に往生したいと願うこと¹²を意味する。衆生は以上の五つの行、五念門を修めることによって初めて功德を成就させることが可能になる。五念門という行を修める対象については、明確に示されている箇所はないが、次に示す十念という行は、『往生論註』巻下で、

問曰、上言知生無生、当是上品生者。若下下品人、乘十念往生、豈非取実生耶。但取実生、即墮二執。一恐不得往生。二恐更生生惑。答。譬如淨摩尼珠、置之濁水、水即清淨。若人雖有無量生死罪濁、聞彼阿彌陀如來至極無生清淨寶珠名号、投之濁心、念念之中罪滅心淨、即得往生。又是如淨摩尼珠以玄黃幣裹投之於水、水即玄黃一如物色。彼清淨佛土有阿彌陀如來无上寶珠。以無量莊嚴功德成就帛裹投之於所往生者心水、豈不能轉生見爲無生智乎。又如水上燃火、火猛即氷解、氷解即火滅。彼下品人、雖不知法性無生、但以称仏名力、作往生意、願生彼土、彼土是無生界、見生之火自然而滅。¹³

と示されているところから、下品が修めるべき行ではないかということが漠然と読み取ることができるようになる。しかし、真名子晃征氏が「上品生・下品生という二種の願生者にそれぞれ異なった往生行を配当する明確な記述は見出せない。」¹⁴と示しているように、絶対的に下品が修めなければならない行と規定されているわけではない。その事を前提に十念という行について以下考察する。『大無量寿経』第十八願に「説我得仏、十方衆生、至心信樂、欲生我国、乃至十念。若不生者、不取正覺、唯除五逆、誹謗正法。」と示されており、『往生論註』下巻にこの第十八願を引用して「仏願力故十念念仏即得往生」¹⁵とあることから十念も五念門同様に衆生が修めるべき行、往生の因として挙げられている。又、『観無量寿経』に、

下下品生者或有衆生、作不善業五逆十惡、具諸不善。如此愚人、惡業故墮惡道經歷多劫受苦無窮。如此愚人、臨命終時、遇善知識種種安慰、為說妙法、教令念仏。彼人、苦逼不暇念仏。善友告言、汝若不能念者、應稱無量壽仏。如是至心令声不絶、具足十念稱南無無量壽仏。¹⁶

と示されているように十念に称名念仏の意が込められているのかそれとも憶念の意のみなのかで様々な意見が見受けられる。まず、十念というその言葉通り十回観想を行うことという意味が十念にはあるが、『往生論註』中に示される十念についての陳述から曇鸞が考える十念は少なくともそのような回数に限りのある念仏を指しているとは考えにくい。後に八番問答の第七問答内でもそのように考えられる理由が示されているが、先に補足しておくとして十念 \parallel 十声つまり十念とは十回称名念仏をすることであると結論づけたのは、曇鸞と同じく七高僧の第五祖である善導大師である。もしそれ以前に曇鸞が十念が称名念仏であることを明確に指摘していたなら、恐らく善導の称名念仏は台頭していなかったであろう。曇鸞は臨終間際に実際に十回念仏を唱えるのは難しいことであるから、十回心の中で念仏を唱えること、つまり憶念が大切であると結論づけたと考えられる。実際、数々の曇鸞の十念解釈の先行研究でも曇鸞の十念に憶念の意が含まれている点について異論はない。ここから実際に行爲に移すというよりかは寧ろ行爲に反映させたいと思う心が大切であると読み取れる。これまでの五念門と十念を詳しくみてきてどちらの行も往生の因として重要であることは理解できたが、果たしてどちらの行を曇鸞は重視していたのだろうか。

第二節 往生行として重要視された理由

先に結論を述べると、五念門と十念、どちらの行を特に重要視していたのかについて明確に記されていたものはなかった。しかしながら、十念よりも五念門の方がより詳細に『往生論註』に記されており、加えて、

案王舎城所説無量寿經、三輩生中雖行有優劣、莫不皆發無上菩提之心。此無上菩提心即是願作佛心。願作佛心即是度衆生心。度衆生心即攝取衆生有佛国土心。是故願生彼安樂淨土者、要發無上菩提心也。若人不發無上菩提心、但聞彼国土受樂無間、為樂故願生、亦當不得往生也。¹⁷

と示され、『往生論註』では最も優れた悟りの心、すなはち無上菩提心を願作佛心や度衆生心と表されている。願作佛心は自分自身が仏になることを願う心であり、度衆生心は衆生を救済したいと願う心を指している。無上菩提心を発した者が仏になって衆生を救おうとする、この本願力そのものが五念門であるところから、曇鸞は十念よりも五念門を重視していたと考えてもよいのではないだろうか。五念門は礼拝門・讚嘆門・作願門・觀察門の四門が、「菩薩、入四種門自利行成就、応知。菩薩、出第五門回向利益他行成就、応知。菩薩、如是修五門行自利利他、速得成就阿耨多羅三藐三菩提故。」と示されているように自利の行で、最後の回向門が利他の行である。殿内氏も、

速やかに無上菩提にまで至ることを可能ならしめる、菩薩の修める真実の二利行としての内容をも持つものと位置づけられているのであり、『浄土論』に説示されていた浄土往生の行とは、このような菩薩行としての内容を持つ五念門だったといえることができる。¹⁸

と述べているところから、単に浄土に往生することだけが目的なのではなく、大乘菩薩道の実践も含有されていた為、重要視されたと考えてよい。そして曇鸞自身が『往生論註』の中で「願生安樂国者、此一句是作願門。天親菩薩、歸命之意也。」と示し、ここで示される作願は本願力を示すため、ここからも五念門を重要視していることが窺える。天親菩薩のような位の高い者について五念門では多く言及されている為、明確に記されていないが、やはり上品向けの行だったと考えても不自然ではないと思われる。『浄土論』の註釈をしている『往生論註』では、以上の点より五念門をベースとする十念解釈が曇鸞の考える往生観だと私は考える。一方で、殿内氏は、

曇鸞は『浄土論』の説示を受けて『往生論註』にその浄土教を示していくのであり、その中で必然的に『浄土論』にあった五念門の説示も釈してはいるが、実のところその浄土教の中心は凡夫の十念往生に置かれていたと見られるのであり、その中では、菩薩の二利行であるような五念門に重きが置かれてはいなかったと思われるのである。¹⁹

と述べている。殿内氏も私と同様に十念という行を修める対象と五念門という行を修める対象が異なるという考えの立場であり、その根拠として「問曰、上言知生無生、当是上品生者。」を示している。これに対し、下下品の往生については十念という行が当てはめられている。冒頭で、五念門と十念どちらの行が重要視されていたのかについて明確には示されていないと述べたがそれに関連することで、石川氏が、『往生論註』巻下の入第一義諦を引用して、

願生といいながら有の根本である生を滅すことができるのかという疑義に対し、その解決のために浄土の莊

嚴相を観察するのであると答えている。阿弥陀仏の浄土とは、仏の清浄なる本願によって建立されたものであって、また無生であり、凡夫が抱くような虚妄の生ではない。またその浄土が、さらに法性に適っていることを根拠として無生であることを重ねて説いている。それゆえにその無生の道理を悟るために十七種の仏土莊嚴相を観察するのであり、それにより、淨信を生じて必ず浄土に往生することができるのであるとしている。上品生の願生者とは、以上のような無生の道理を体得し得る者をいう。また、その上品生の者は無生の道理を悟るために観察をしなくてはならないが、これは奢摩他・毘婆舍那を行う作願門・觀察門を意図したものであることに疑いはない。すなわち、上品生においては五念門の実践が求められるのである。²⁰

と、上品が修めべき行は五念門であると述べている。下品の修めべき行については、氷上燃火の例を引用し、無生を知る上品生の願生者に対して下品下生の願生者は十念によって往生することができる。しかしそれは実際には実体としての生によってしまい、往生することはできず、なおかつ得生に迷いを生じてしまうのではないかと問うている。これに対して、淨摩尼珠を濁った水に投ずれば清らかな水となるように、阿弥陀仏の無生であり清浄なる名号、ならびに莊嚴相が願生者の心中に入ることによって、造罪の心や、生を実体的なものともみる意識作用そのものが滅するのであり、下品下生者は無生を知らずとも、称名を実践して、願生の心をおこすことによって、それまでの実体としての生とみていたことが滅するのであると答えている。(中略) すなわち、曇鸞は往生の論理として、上品生の往生を基軸と考えながらも、それと並列する形で、十念の実践に基づく阿弥陀仏の不可思議力(本願力)を根拠として下品下生の得生が可能になると考えていたの

ではないかということである。(中略)以上を整理するならば、上品生も下品下生者と同様、阿弥陀仏の本願力により得生するのであり、五念門実践によりその本願力を増上縁として成仏するとの説示からも、曇鸞は下品下生に限らず、上品生の願生者の存在も、当然意識していたであろうことがわかる。そのみにとどまらず、本節冒頭に下品下生の願生者とその実践である十念に関連しない言及に関する意図について問題としたが、むしろ曇鸞は論理的には、この上品生の往生を基軸として下品下生者の往生を考えていたということがわかる。²¹

と下品下生が修めるべき行は十念であると述べているのと同時に、十念は下品が修めるべき行というよりかはむしろ上品・下品関係なく浄土に往生したいと心から願う人全員に対する行であると読み取ることができる。私は、『往生論註』内で具体的ににより詳細に触れられているのが五念門であり、五念門を軸に回向の話がでてくるため往生行として重要視されているのは五念門の方であると考えていたが、石川氏も同様に上品生の往生を基軸に考えてと示しているところから、五念門を修められるようになってほしいという下品に向けての強いメッセージ性を感じざるを得ない。一方で殿内氏が、下品が修めるべき行である十念がベースであると示されているところから、まとめると、往生行の中心がどちらであるかというのが争点で、根拠となる文献や『往生論註』の解釈次第で結論が異なってくるといえる。『往生論註』を参照しても明確にどちらの行が重要視されているかについて言及されている箇所はないため、解釈次第で意見は異なる。あくまでも私個人は、以上に述べたことからやがては下品も五念門を修めることができるようにという意図の元、五念門を基軸に十念という行が展開されていたと結論

づけた。ゆえに私は曇鸞は十念よりも五念門をより重要視していたと考える。

第二章 八番問答

第一節 各問答の役割

問曰、天親菩薩廻向章中、普共諸衆生、往生安樂国此指、共何等衆生耶。答曰、案王舎城所説無量壽經、仏告阿難十方恒河沙諸仏如来皆共称嘆無量寿仏威神功德不可思議。諸有衆生聞其名号信心歎喜乃至一念。至心廻向。願生彼生國、即得往生、住不退轉。唯除五逆誹謗正法。案此而言、一切外道凡夫人皆得往生。又如觀無量壽經。有九品往生下下品生者、或有衆生、作不善業五逆十惡、具諸不善。如此愚人、以惡業故應墮惡道逕歴多劫受苦无窮。如此愚人、臨命終時、遇善知識種種安慰、爲説妙法、教令念佛。彼人、苦逼不遑念佛。善友告言、汝若不能念者應稱無量壽佛。如是至心令聲不絶、具足十念稱南无無量壽佛稱。佛名故於、念念中除八十億劫生死之罪。命終之後、見金蓮華、猶如日輪住其人前。如一念頃即得往生極樂世界。於蓮華中滿十大劫蓮華方開觀世音大勢至、以大悲音聲爲其廣説諸法實相除滅罪法。聞已歡喜、應時則發菩提之心。是名下品下生者。以此經證、明知下品凡夫但令不誹謗正法、信佛因縁皆得往生。²²

にあるように、『無量壽經』下巻で五逆・誹謗正法を行った者以外は一切の凡夫が往生の対象であると示され、『観無量壽經』では五逆を行った者も含む九品が往生の対象であると示されている。この第一問答ではそうした往生

対象の違いについて注目している。又、五逆・十悪を犯した人々は、自分自身の命の灯火が消えかけている時に自身を正しい方向に導いてくれる人に出会い、善知識は心を安らかに慰めようとしてくれたものの、当本人は罪の意識を払拭することができず苦しみ、念仏を行うことができなかったが、「善友告言、汝若不能念者、応称無量寿仏。如是、至心令声不絶、具足十念、称南無阿弥陀仏。称仏名故、於念念中、除八十億劫生死之罪。」^{2,3}と『往生論註』に示されているように善知識(善友)が心の中や頭の中に存在する罪の意識が払拭されず心を安らかに保つことができないのならば、無量寿仏と声に出すことを勧め、その後心の中で念仏を唱えることができないのならば、十念を具足して南無無量寿仏と声に出して称えることで、八十億劫という果てしない時間の中で自分自身が犯した罪が消えて、極楽世界に往生することができる。ここでは、心の中で思っている内容と実際に行動している内容が異なっていたとしても、人間はその行動を遂行することが可能である、つまり散善が見受けられる。又、第一問答の最後には「下品凡夫、但令不誹謗正法、信佛因縁皆得往生。」と示されているが、それは浄土に往生できるか否かは罪の軽重ではなく、阿弥陀仏を信じるか否かで決定されるという意味である。『観無量寿経』もそういう意味で下下品を含む九品が往生対象に含まれている。

問曰、無量寿経言願往生者皆往生唯除五逆誹謗正法。観無量寿経言五逆十悪具諸不善、亦得往生。此二経、云何會。答曰、一経以具二種重罪。一者五逆、二者誹謗正法。以此二種罪故、所以不得往生。一経但言作十悪五逆等罪、不言誹謗正法、以不誹謗正法故是故得生。^{2,4}

にあるように『無量寿経』と『観無量寿経』では往生対象が異なる点について『観無量寿経』においての往生

対象の決定の真意についての問答が第一問答であったが、この第二問答は往生対象が異なるという最大の矛盾が実は矛盾ではなかったことがわかる問答である。『無量寿経』での重罪は二つあり、それが五逆と誹謗正法で、その二つの罪を犯した者は浄土に往生することができないとされている。一方で、『観無量寿経』での重罪も十悪・五逆である。まとめると、『無量寿経』と『観無量寿経』とで往生対象ではないのは誹謗正法を犯した者で一致すると曇鸞がみていたことがわかる。

問曰、假使一人具五逆罪而不誹謗正法、經許得生。復有一人、但誹謗正法而无五逆諸罪、願往生者得生以不。

答曰、但令誹謗正法、雖更无餘罪、必不得生。何以言之、經言、五逆罪人、墮阿鼻大地獄中具受一劫重罪。

誹謗正法人墮阿鼻大地獄中此劫若盡、復轉至他方阿鼻大地獄中。如是展轉逕百千阿鼻大地獄。佛、不記得出時節。以誹謗正法罪極重故。又正法者即是佛法。此愚痴人既生誹謗。安有願生仏土之理。假使但貪彼生安樂而願生者、亦如求非水之氷无烟之火、豈有得理。²⁵

にあるように、第二問答では往生対象ではない者が五逆と誹謗正法を犯した者で『無量寿経』も『観無量寿経』も一致した。第三問答では五逆は犯しているが正法は誹謗していない者、又は、正法は誹謗しているが、五逆は犯していない者の往生の是非についての問答である。『往生論註』内で『摩訶般若波羅蜜経』を引用し、一般的に五逆を犯すより誹謗正法を犯す方が罪が重いとされている。したがって、五逆やその他の罪は犯していないが正法を誹謗してしまった者は如何なる場合でも往生できないことになる、誹謗正法を犯してしまった者は地獄の中でも最下層に位置し、地獄に堕ち、到着するまで二千年の歳月を要する上、一劫というとてもなく長い年月を

地獄で過ごし、これが終わってもまた他の地獄に堕ち、次々に地獄を巡ることになる。そして具体的にいつそのループから抜け出せるのかは明らかになっていない。正しい仏の教えを謗る者が浄土に往生したいと願う理由はどこにもないと示している点においては浄土に往生するための教えを謗るということはつまり浄土に往生したいと願っていないから往生できる可能性がないと言いつつ根拠があると思われる。又、五逆を犯したものの、正法は誹謗していない者の往生については、五逆を犯しても一番大切とされる正法を犯していないならば往生することは可能であると第三問答には示されている。第二問答での往生可能対象で五逆と誹謗正法という二つの重罪を犯した者は往生可能対象から外れることが判明したが、第三問答では往生可能対象範囲を誹謗正法を犯した者以外とさらに限定的に狭めることができる。この時点で曇鸞の考える往生可能対象は誹謗正法を犯した者以外だといえる。続いて、「問曰、何等相是誹謗正法。答曰、若言无佛、无佛法、无菩薩、无菩薩法、如是等見、若心自解、若従他受其心決定皆名誹謗正法。」²⁶に示されるように第三問答までで往生可能対象は明らかになったが、第四問答はその誹謗正法とはどのようなものなのかを説明している問答である。阿弥陀仏がいなければ、その教えもなく、菩薩がいなければその教えもない、このように自分自身で決定したり又他人に唆されて決定する、決定を下すことで全てを理解したことにしてしまうことなどは全て正法を誹謗することになるという意味がこの第四問答である。仏の教えを否定することは自らが浄土に往生しようと思うその願いを排除することに繋がると推測されるが故、誹謗正法に繋がることは妥当であると思われるが、一方で仏の教えに絶対性があることを踏まえ、阿弥陀仏がいなければ、その教えもなく、菩薩がいなければその教えもない為、自分自身の解釈であらゆる

ことが決定してしまうのはある程度仕方のない事であるのにも関わらず、誹謗正法に触れてしまうのは、少し問題点であると私は思う。しかし、此れほどに教えに不変性をもたせることが可能なのであれば、宗教としての確立性や精密度は上がるため、一概に問題だとも言い切れないかもしれない。

問曰、如是等計但是己事。於衆生有何苦惱踰於五逆罪耶。答曰、若无諸佛菩薩、說世間、出世間、善道教化衆生者、豈知有仁義禮智信耶。如是世間一切善法皆斷、出世間一切賢聖皆滅。汝但知五逆罪爲重、而不知五逆罪從无正法生。是故誹謗正法人其罪最重。²⁷

にあるように、第五問答は、誹謗正法が五逆よりも罪が重いと位置づけられている理由についての問答である。世間や世俗から離れた清らかな仏道のことを指す出世間からそれとは真逆の衆生の世界である世間に衆生を教化するために来るあらゆる仏や菩薩がもしいなければ、仁・義・礼・智・信の五常を知ることができず、又世間のあらゆる善い行いを判断しているあらゆる尊く優れた聖者もないだろうと『往生論註』には示されている。最後に五逆罪は誹謗法罪がなければ生じないものであるから、誹謗法罪を犯す者は最も罪が重いと結論づけられている。しかし第三問答で、五逆罪を犯した者の往生は認められ、誹謗法罪を犯した者の往生は認められないと指摘しているのにも関わらず、この第五問答では誹謗法罪が生じなければ、五逆罪も生じないつまり五逆罪を犯した者の往生が可能である前提ならば誹謗法罪を犯した者の往生についても認められることを暗示している。誹謗正法を犯した人々は往生ができないと示されているが、第五問答では、誹謗法罪が生じなければ、五逆罪も生じないと述べられ、その対偶の矛盾が、曇鸞の意図する内容でないと仮定すれば、何故誹謗法罪を犯した者も救われる可能性が

あると読み取れるような表現をしたのだろうか。これについては、謗法罪を犯した者は前述にある通り往生することはできないものの、回心に出遇った時は必ずしも往生できないとは言い切れないのではないだろうか。この回心については曇鸞自身が『往生論註』で往相回向と還相回向の二種の回向を示しているところから十分に根拠はあるといえる。

問曰、『業道經』言、業道如稱。重者先牽。如『觀无量壽經』言。有人造五逆十惡具諸不善。應墮惡道逕歷多劫受无量苦。臨命終時、遇善知識、教稱南无无量壽佛。如是至心令聲不絕具足十念便得往生安樂淨土。即入大乘正定之聚畢竟不退。興三塗諸苦永隔。先牽之義、於理如何。又曠劫已來、備造諸行、有漏之法繫屬三界。但以十念念阿彌陀佛便出三界。繫業之義復欲云何。答曰、汝謂。五逆十惡繫業等爲重以下品人十念爲輕應爲罪所牽先墮地獄繫在三界者、今當以義校量輕重之義。在心、在緣、在決定、不在時節久近多少也。云何在心。彼造罪人自依止虛妄顛倒見生。此十念者依善知識方便安慰聞實相法生。一實、一虛。豈得相比。譬如千歲闇室光若暫至即便明朗。闇豈得言有室千歲而不去耶。是名在心。云何在緣。彼造罪人自依止妄想心依煩惱虛妄果報衆生生。此十念者依止无上信心依阿彌陀如來方便莊嚴真實清淨无量功德名號生。譬如有人被毒箭所中截筋破骨、聞滅除藥鼓即箭出毒除。豈可得言彼箭深毒厲聞鼓音聲不能拔箭去毒耶。是名在緣。云何在決定。彼造罪人依止有後心有間心生。此十念者依止无後心无間心生。是名決定。校量三義十念者重重者先牽能出三有。兩經一義耳。²⁸

にあるように、第六問答は業道因果の道理を説いた經典の総称である『業道經』に示された業道の称の例を引用

し、罪の軽重とその往生についての問答である。称の軽いものより重いものに牽かれる性質を、命の灯火が消える前の短い時間に善知識に出遇い十念を具足し、〈南無無量寿仏〉と念仏する重さと悪い道に入り込み、極めて長い年月の間五逆や十悪という罪を犯してきた重さと比較した際に後者の方が重いため、臨終間際の十念では往生することができないと説示している。その問いに対し、曇鸞は大罪を犯す人と十念をする人の往生に即しての軽重比較の際に、在心・在縁・在決定の三義を挙げています。一つ目の在心について五逆や十悪を犯してしまう人は、自分から真実の理に背いた誤った見解を抛り所として示され、十念をする人は善知識に出遇い、善知識から様々なことを教わり又自身の心を安定した状態に保たせてくれたその結果、実相の法を聞くことによつて生じると解釈されている。二つ目の在縁について同じく五逆や十悪を犯してしまう人は妄想の心にとどまり、煩惱の報いを受けることになる。十念をする人はこの上ない最も優れた信心を獲得し、阿弥陀仏の方便莊嚴で且つ煩惱を離れた清らかな悟り心を備えた無量の功德の名号によつて生じると解釈されている。ここで煩惱を離れた清らかな悟り心と解釈したのは真実清浄という言葉であるが、在縁で五逆や十悪を犯してしまう人は妄想の心に囚われているとあり、ここでの往生ができない原因は嘘や偽りでまみれたつまり煩惱だらけの心にあると読み取ることが出来る。そして十念をする人は信心を獲得し、つまり煩惱はなくなっている状態であることを根拠にここでの真実莊嚴の解釈は浄土に対しての清らかさよりはむしろ自分自身の心の清らかさを表していると解釈するのが適切ではないかという結論に至った。最後三つ目の在決定についても在心・在縁と同様に、五逆や十悪を犯してしまう者は、まだ後があると思っているゆっくりした心の有後心と他の様々な想いが混じった専一で

はない心である有間心に頼っていると示され、十念をする人は前者とは真逆の無後心と無間心に頼ることによって生じると解釈されている。そしてこの第六問答の最後、この在心・在縁・在決定の三義と五逆・十悪の罪を比較した際、前者の方が重いため、往生が可能であると曇鸞は結論づけている。そして第六問答では五逆・十悪を犯しても十念を具足すれば浄土に往生することが可能で、又煩惱と結びついて増大させる有漏の法が三界に結びついているが、十念によって三界から出ることができると示されている。これらを踏まえてまとめると十念、つまり在心・在縁・在決定の三義及び浄土に往生したいと願う思いと信心の獲得を備えることが曇鸞の考える往生観であり、それらを不備なく備えている人間が往生対象になるといえる。

問曰、幾時名爲一念。答曰、百一生滅名一刹那。六十刹那名爲一念。此中云念者不取此時節也。但言憶念阿彌陀佛若總相、若別相隨所觀緣、心無他想十念相續名爲十念。但稱名號亦復如是。²⁹

にあるように、第七問答は第六問答で示した十念の時の概念についての問答である。どれほどの時間をもって一念と数えるのかについて、刹那生滅という概念に照らし十念という「時」について示している。刹那生滅とは、一刹那という非常に短い時間の中にも生滅が存在し、あらゆる生物はこれを繰り返しているという概念のことであり、ここでは六十の刹那で一念を表現することが可能である。しかし、曇鸞はそういった時間的な概念の念を十念と捉えず、ここでの念はただ阿彌陀仏を憶念することであると示している。ここでも再度、曇鸞は浄土に往生したいと願う心と信心を往生する際に重要なことであると考えていることが伺える。加えて曇鸞は心に阿彌陀仏の総相か別相を思い浮かべることによって他のことを思い浮かべることがなくなった状態が継続されること、

つまり憶念すること及び名号を称名することも十念であると結論づけていると考えられる。十念に称名の意が含まれているかどうかについては後にも触れる予定だが、憶念することも称名することも十念であると読み取れるようなここでの表現及び第一問答及び第六問答で絶えず声にだして南無阿弥陀仏と称名念仏することで浄土に往生することが可能であると示されているところや、又この第七問答の「名号を称するもまたかくのごとし」の部分から、曇鸞の十念往生には憶念だけではなく称名念仏の意も含まれていると斟酌しても不自然ではないのだろうか。加えて、『無量寿経』第十八願「設我得仏、十方衆生、至心信樂、欲生我國、乃至十念。若不生者、不取正覺。唯除五逆、誹謗正法。」と説かれており、ここで示される十念を後に善導が自身の著書である『往生礼讃』で「若我成仏 十方衆生 称我名号 下至十声 若不生者 不取正覺」³⁰と示した。この十念は称名念仏をすることであることを明確にしたところも踏まえると、曇鸞の十念に全く称名念仏の意が含まれていないとはい切れないのではないだろうか。

問曰、心若他縁、攝之令還可知念之多少。但知多少、復非无間。若凝心注想、復依何可得記念之多少。答曰、經言、十念者明業事成辨耳。不必須知頭數也。如言蟪蛄不識春秋。伊虫豈知朱陽之節乎。知者言之耳。十念業成者是亦通神者言之耳。但積念相續不縁他事便罷。復何假須知念之頭數也。若必須知亦有方便。必須口授。

不得題之筆點。³¹

にあるように、第八問答は十念をする気持ちが離れた時はその心をしまい、その念の数を知るべきであるが、念の数を知ると念仏を相續することにはならず、心を込めて気持ちを統一すれば何によってその数を知ることがで

きるのかという問いである。これについて曇鸞は「業事成弁を明かすのみ」と蝸の例えを交えて説明している。つまり蝸は夏の終わりの短い間しか生きられず、春や秋を知らずに死んでいくのと同様に、十念の相続によって往生するための業事が成弁することを知っているのはそのことについて熟知している仏のみしか知ることができないと述べている。そして、最後にただ念仏以外の一切を消して念仏を相続し続けることができれば往生の業も自然と備わるので念を数える必要もなくなると示している。

第二節 八番問答より参酌した十念解釈

第一章から順番に十念の概念についてみてきたが、ここでは八番問答、具体的には第六問答、第八問答を中心とした十念について考察したい。第二章第一節までに示した通り、十念という往生行は主に下品のための往生行であり、かつ九品が修めるべき行でもある。第六問答では五逆罪や謗法罪といった重さは臨終前に南無阿弥陀仏と憶念する重さよりも重いため、往生ができないと称の例を用いて説明されているが、往生が可能になる人ほどのような人なのか。この第六問答の続きには、在心・在縁・在決定の三義の重さは五逆や十悪といった罪の重さよりも重いため往生できると示されている。第三問答や第四問答で示されている通り、謗法罪は仏の教えを謗る、そもそも浄土に往生したいと願っていない、仏願力に頼ろうとしないその心が良くないために往生ができないように、この第六問答でも十念という重さをもってしても敵わないほどの罪の重さであることがわかる。曇鸞は、在心について造罪の人は偽りの想いに囚われ、罪を造ったことに対し、十念の者は善知識が方便によって実相の

法を説くのを聞くことによって生じたものであると解釈している。在縁については造罪の人は妄想の心にとどまり、煩惱の報いをうけた衆生であるから罪が生じるのに対し、十念の者は信心を得て、阿弥陀仏の方便莊嚴の眞實の清浄さをそなえた無量の功德をもつ名号によって生じたものであると解釈している。この阿弥陀仏の方便莊嚴の眞實の清浄さをそなえた無量の功德をもつ名号によって生じるものが十念であると解釈することができる。在決定については、造罪の人は後があるという心持ちで雑念を交えたうえで生じたものであるのに対し、十念の者は後がないという想いで、他想間雑のない心で生じたのであるとする。³² これを受けて、十念とは仏の姿（実相）を表し、その実相がそのまま諸法に通じるところがあるため、実相を思い浮かべることつまり憶念も十念であると解釈されていると考えることができる。第七問答では、十念をする際にどうして数を数える必要があるのか、十念が数で決まるものではないことを示している。第六問答での称の例で示された罪と念の重さ、十念をする際には三義が必須であることに加えて、曇鸞の考える十念はその念の数を表しているのではなく、心から実相を思い浮かべてひたすらに念を相続することであると読み取ることができる。第八問答では、十念をする気持ちがなくなつた際つまり心に実相を思い浮かべることができなくなつた際の対処について、他に考えていることを一度おいて、念の数を知るべきであると示されている。しかし、第七問答でも示されているように、念の数やその長短は重要視しておらず、では何のために他のことを思い浮かべることがを我慢してまで念の数を知る必要があるのだろうか。第八問答の業事成弁について『観無量寿経』に十念はその業が成就したことを指し、その数を知らることを意図しているわけではないと定義されており、十念業成では、十念という業の成就は、私達自身では

知ることができず、そのことを知ることができずのは当然仏であるため、私達は念の数を知る必要はなく、ひたすら念を積み、相續して他のことを考える隙をなくすことができれば自然とその往生の業が成就すると示されている。第七問答での念の数を知らないという真意は、自身がそのことを知ったところで往生の業が成就したか否かを知ることにはできない為に、知る必要がないということであった。第八問答で念の数を知るべきだと示したのはその数を私達が知る必要性がないことを説くためであったと考えられる。以上が、第六問答、第八問答での十念解釈であったが、ここからは前章でも少し触れたように第七問答の最後、「心无他想念十念相續名爲十念。但稱名號亦復如是。」の解釈について、十念には称名念仏の意が含まれているのか否かを考察したい。それに即して五念門の讚嘆門を再度みたい。讚嘆門は「云何讚嘆、口業讚嘆。讚者讚揚也。嘆者歌嘆也。讚嘆、非口不宣。故曰口業也。稱彼如來名、如彼如來光明智相、如彼名義、欲如實修行相應故。」³³に示されるように口業こそが讚嘆門であり、阿彌陀如來の名を称することつまり称名をもって光明の智慧の相のように、その仏の名のように如實修行をして決定の信を得ることを目的としている行である。ここでは、口業と述べていることや阿彌陀仏の名を称することと明確に示されているので称名の行であると捉えることができる。ここから少なくとも曇鸞が考える往生の一つに称名が含まれていることが伺える。第一章でも触れたように、五念門を実践する対象は明記はされていないが、石川氏は『往生論註』卷下の入第一義諦に即して、上品生においては五念門の実践が求められると述べている。私もそのように考えており、石川氏は合わせて「無生であり、なおかつ法性に随順していることは、曇鸞の教理解解において重要な要素である。」とも述べている。ここからもやはり五念門を中心に曇鸞の往生

嚴禁

観が形成されていったと考えられる。このことを踏まえると、十念にも称名の意が含まれている可能性があるのではないだろうか。石川氏は、『大無量寿経』所説の第十八願文を挙げ、「その阿弥陀仏の願力により、十念の念仏によって往生することができるとする。ここでの十念とは憶念を意味するものであるが、曇鸞はその憶念を称名と不可分な行法であると捉えている。少なくともその称名を以て易行道の行相としている点に共通点を見ることができると述べている。私も、第十八願で示される十念とは、十回念仏するというような回数概念ではなく、心や頭の中で阿弥陀仏を思い浮かべ、念仏を称える憶念であると同時に、それと同等であると第七問答で示されているため、十念には憶念と称名念仏の二つの意味が存在していると考えられる。しかし、十念解釈には様々な解釈があり、そもそも殿内氏は「曇鸞が五念門自体に称名憶念に重なる往生行としての意味を見出していたとは考えにくい。」^{3,5}と述べ、五念門の讚嘆門と十念については何ら関係性はなく、それぞれ独立したものであり、加えて十念には称名念仏の意はないと解釈している。確かに五念門と十念は役割も異なり、各自修めるべき対象も異なっているが、実際に十念に関しては上品・下品関係なく一切衆生が修めるべき行と示されており、それぞれ独立したものとは言い難い部分もあると私は考える。五念門と十念を不可分な関係と捉える立場か、それとも独立した行であるという立場をとるのかでも十念解釈に大きな影響を与えるといえる。

又、第七問答に示されていたように、憶念と十念の関係は易行道が関係していると考えられる。曇鸞の難易二道は、龍樹の『十住毘婆沙論』「易行品」の説示に基づいて、阿弥陀仏の本願力による往生行を易行道、自力による往生行を難行道と示される。『往生論註』巻上には次のように示されている。

謹案龍樹菩薩十住毘婆沙、云菩薩、求阿毘跋致有二種道。一者難行道、二者易行道。難行道者、謂於五濁之世於无佛時求阿毘跋致。爲難此難乃有多途。粗言五三、以示義意。一者外道善乱菩薩法。二者聲聞自利障大慈悲。三者无願惡人破他勝德。四者顛倒善果能壞梵行。五者唯是自力无他力持。如斯等事、觸目皆是。譬如陸路步行則苦。易行道者、謂但以信佛因緣願生淨土。乘佛願力、便得往生彼清淨土。佛力住持、即入大乘正定之聚。正定即是阿毘跋致。譬如水路乘船則樂。是无量壽經優波提舍、蓋上之極致、不退之風航者也。³⁶

ここに繰り返し示されている阿毘跋致とは、菩薩が仏道修行を行うと戻れない、つまり不退転に入ることを目指す。特に易行道は、菩薩の道を歩むことが難しい人々に向けての行であり、『往生論註』巻上の冒頭で示しているところは、上品にむけた五念門とは別の往生行として、つまり、十念を行う下品の人々向けに示されていると十分に言える。

結論

第一章で、五念門のそれぞれの役割及び十念の定義について論じ、第二章で『往生論註』の八番問答を参照しながら五念門についてはより深く讚嘆門を中心に、罪の種類によっての往生可否対象を、又十念については『大無量壽經』第十八願と第六問答、第八問答を参照し、十念の真意及びその行を修めるべき対象や、難易二道につ

いて論じてきた。最初の問題点であった、五念門と十念のどちらの行が重要視されているのかについては、『往生論註』に明確な記載はなく、どちらの行を曇鸞が重要視していたのか断定するに至らなかった。だが、『往生論註』に即して言えば、十念よりも五念門のほうが詳細に記されており、本願力が五念門にあるところから私は五念門という行をベースとして曇鸞は展開していったのではないかと考える。今は五念門を修めることができない凡夫も、やがては五念門を修めることができるようになってほしいという願いが含まれているのではないだろうか。

往生をする際に、五念門も十念もどちらも必要不可欠な行として示されており、十念は上品・下品関係なく修めべき行で、その十念という行は憶念だけなのかそれとも憶念と称名念仏の意が含まれているのが次の問題点であった。この問題点も先行研究者の中で意見が割れており、『往生論註』にも明記されていないなかった。つまり、『往生論註』の解釈次第にはなるが、主に第七問答の最後の「心に他相なくして十念相続するをなづけて十念とす。ただ名号を称するもまたまたかくのごとし」の解釈で意見が割れている。完全に称名念仏と憶念で切り離すべきであるという意見や、曇鸞は意図していないと推測されるが称名念仏と憶念を全く切り離して考えるのは難しいという意見もあった。私はこれらの意見も踏まえた上で、曇鸞の十念には憶念をベースに称名念仏の意も含まれていると考える。第七問答の解釈での「またまたかくのごとし」が名号を称する、つまり称名念仏を指すと理解したのと、後に善導が十念を称名念仏と示しているところから称名念仏をベースに曇鸞が十念を考えていた訳ではないものの、称名念仏の意も汲み取れるように明記していないと推測できたのが主な理由である。曇鸞の往生観について非常に多くの見解があり、それはつまり『往生論註』の解釈がそれだけ多種多様であり、難解で

あるということがわかる。

- 1 『浄真全』 四百三十五頁
- 2 『浄真全』 二十五頁
- 3 『浄真全』 四百三十五頁
- 4 『浄真全』 四百五十二頁―四百五十三頁
- 5 〓 身業
- 6 『浄真全』 四百五十三頁―四百五十四頁
- 7 〓 口業
- 8 『浄真全』 四百五十一頁
- 9 『浄真全』 四百五十四頁
- 10 〓 意業
- 11 『浄真全』 四百八十一頁
- 12 〓 方便智業
- 13 『浄真全』 五百六頁
- 14 真名子晃征「『往生論註』における五念門と十念」
- 15 『浄真全』 五百二十八頁
- 16 『浄真全』 九十七頁
- 17 『浄真全』 五百十九頁
- 18 殿内恒「曇鸞における浄土往生の行と機」百五十一頁―百五十二頁
- 19 殿内恒「曇鸞における浄土往生の行と機」百五十七頁
- 20 石川琢道『曇鸞浄土教形成論』百六十二頁―百六十三頁

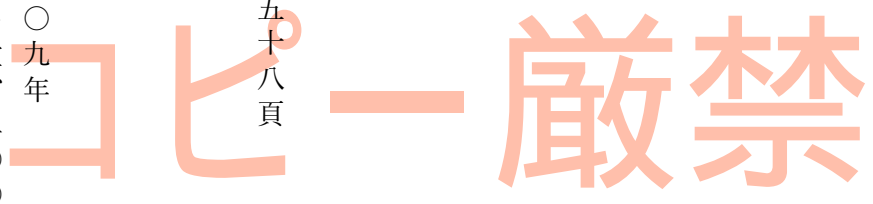
コピー厳禁

2 1 石川琢道 『曇鸞浄土教形成論』 百六十三頁―百六十六頁
 2 2 『浄真全』 四百八十一頁―四百八十二頁
 2 3 『浄真全』 九十七頁
 2 4 『浄真全』 四百八十三頁
 2 5 『浄真全』 四百八十三頁
 2 6 『浄真全』 四百八十三頁―四百八十四頁
 2 7 『浄真全』 四百八十四頁
 2 8 『浄真全』 四百八十四頁―四百八十五頁
 2 9 『浄真全』 四百八十五頁
 3 0 『浄真全』 九百五十八頁
 3 1 『浄真全』 四百八十五頁―四百八十六頁
 3 2 『浄土宗大辞典』 二百四十七頁
 3 3 『浄真全』 四百五十三頁
 3 4 石川琢道 『曇鸞浄土教形成論』 百八十八頁
 3 5 殿内恒 「曇鸞における浄土往生の行と機」 百五十八頁
 3 6 『浄真全』 四百四十九頁

書籍

石川琢道 『曇鸞浄土教形成論』 法藏館、二〇〇九年
 武田龍精編 『曇鸞浄土教思想の研究』 永田文昌堂、二〇〇八年
 論註研究会編 『曇鸞の世界：往生論註の基礎的研究』、一九九六年

論文



尾畑文正「曇鸞の『浄土論』解釈の視点」『真宗研究：真宗研究学会研究紀要』（五十四）、二〇一〇年
経隆優「本願における唯除―曇鸞における謗法の問題―」『大谷学報』第五十九卷、一九七九年
殿内恒「曇鸞における浄土往生の行と機」『曇鸞浄土教思想の研究』永田文昌堂、二〇〇八年
殿内恒「真宗相承にみる五念門の意義」『真宗研究：真宗研究学会研究紀要』（四十八）、二〇〇四年
中平了悟『『往生論註』の十念について』『印度学仏教学研究』第五十一卷（一）、二〇〇二年
普賢保之「親鸞における八番問答の受容」『印度学仏教学研究』第四十一卷（一）、一九九二年
普賢保之「曇鸞における八番問答の意義」『曇鸞の世界：往生論註の基礎的研究』、一九九六年
真名子晃征「『往生論註』における五念門と十念」『親鸞と人間：光華会宗教研究論集』第四卷、二〇一三年

コピー